

捨てられ雑用ティマーですが、

を

SHINRA BANSHO
WO SUBETEMO IIDESUKA?

森羅万象

統べても
いいですか？

さい つよ
覚醒したので最強ペットと
今度こそ楽しく過ごしたい！

4
vol.



TORYUUNOTSUKI

登龍乃月

illustration みそに

ウトガルド

冥界の種族である鬼の王にして、ミミルの父。赤い肌と見上げるほどの巨躯で威厳に溢れる。

ガレフ

仮面で素顔を隠す剣士。その剣術は今は亡き英雄を思わせる。

リン

アダムが所属していたパーティの魔法使い。解散後は魔道具研究者として活躍している。

【聖王龍鬼】の仲間達**ネメア****ミミル****モニカ****メルト**

覚醒したアダムの力によって生まれ変わったケルベロスのサーヴァント。

リリス

幻獣王の娘。アダムの正妻を名乗り、時には優しく、時には情熱的にアダムを支える。

アダム

パーティを追い出され陥った窮地で、【森羅万象の王】へと覚醒したティマー。新たな仲間と第二の冒険者生活を楽しむ。

第一章 異変

俺、アダムがリーダーを務めるパーティ【聖王龍鬼】は、依頼を受けて向かつたとある廃屋敷の調査中に、半年間行方不明になつた。

その後も、幻獣王の娘にして頼れる仲間、リリスの婚姻を止めるべく幻獣界に渡つたり、リリスと許嫁との結婚式をぶち壊した上で、リリスの父親であり幻獣界の王であるバハムートエデンと友好を深めたり、ギュスター・ヴという友と呼べるドラゴンが出来たり……さらには悪魔界の刺客、悪魔王の娘であるヴァルフレイアという強敵が戦いを挑んできたりと、すつたもんだがあつてから早一年が過ぎた。

この一年は、別世界の誰かが訪ねてきたり、何かに巻き込まれたりなどのトラブルもなく、時は冒險者ギルドからの依頼をこなし、時には高難度ダンジョンに挑み、またある時は人類未踏破の地域を探索してみたりと、平凡で充実した冒險者生活を謳歌していた。

俺が以前所属していたパーティ【ラディウス】に捨てられ、【森羅万象の王】に覚醒してから怒ど涛の日々だったのと、落ち着いている最近はとても楽しい。

俺は先日のヴァルフレイアとの戦いを経て、森羅万象の王としての力が一段階上がつた。が、だ

からといって俺自身ががらりと変わった、なんて事はない。

新しく何体かティムはしたけれど、新たな力に目覚める事もなかつた。

どんなモンスターをティムしたのかつて？

まずは港町オリヴィエ近郊で暴れていたボブゴブリンのリーダー、ゴブリンロードだ。

こいつはゴブリンの進化系モンスターであり、強さはA級程度。ロードの名の通り、自分より弱いゴブリン達を統率し相手に差し向けるので、冒険者は必然的に多数との戦闘を強いられる。

そんなゴブリンロードをティムした俺は、オリヴィエおよび王都近郊に生息しているゴブリンらを従え、人間を襲うなという命令を出した。

その理由は、当時王国内でゴブリンが大量発生して、被害が多発していたからだ。その対処で軍も冒険者も人手不足が問題になつていたのだ。

危険なモンスターはゴブリンだけではないので、他のモンスターの対応にも人員を割かなければならぬ。

そこで俺は、まずゴブリンの脅威を排除した。

他にも十数種類のモンスターを探してのんびり高めていこうと思つてゐる。

そこは焦らずに、またモンスターを探してのんびり高めていこうと思つてゐる。

パーティのメンバーはといえば、リリスは相変わらず俺にべつたりで変わつた事はあまりない。

強いて挙げるとするならば、犬猿の仲だつたミミルとの関係が深くなつた事くらいだろうか。

ミミルは冥界の一種族である鬼、その王である鬼王の娘だ。王の娘同士、プライドの衝突などがあるのだろうと俺は推測している。

出会つた頃は顔を合わせれば言い合いになつてゐた二人だが、今では仲のいい姉妹のような関係だ。

もちろん嫌味の言い合いなどはあるが、昔に比べれば実に可愛いものである。

「こんの腐れトカゲ！ 妾が大事に取つておいたデザートを勝手に食つたじやろ！」

今もミミルがリリスに凄い勢いで抗議しているが……

「えー？ 知りませんわー？ あ、そこに置いてあつたお菓子は頂きましたけど」

「それじやい！ ぼけー！」

「おーほつほつほ！ だつたら名前くらい書いておくんですわねー！ あら、貴方文字つて書けま

して？」

「おのれ馬鹿にしおつて！ 字くらい書けるわい！ 表に出ろお！」

俺の後ろでガヤガヤどうるさいが……うん、実に仲良くやつてゐる。

ミミルもリリスの挑発には怒りながらも、どこか楽しんでいる様子だ。

二人のやり取りを眺めていると、かつての殺伐とした空気が嘘のように感じられる。今や家族のような温かさを感じるほどだ。

また、聖女でありS級冒険者となつたモニカは、今では王都の教会で一番の発言権を持つに至つた。そして、王都の各地に教会や孤児院をもつと増やし、広く救いの手を差し伸べたいと、冒険の合間に色々と奮闘している。

ミミルはギルドから依頼を受け、戦闘教官として冒険者の育成に励んでいる。そのおかげなのかは分からぬが、新たにS級冒険者が何人か誕生したらしい。

ダンジョンに潜るのはもう飽きたようで、教官としてギルドに通ううちに、ギルド職員や女性冒険者と仲良くなり、しばしば誘いを受けてお茶会などにも顔を出しているようだ。

もちろん男性からのアタックも多いらしく、それを満更でもなさそうに話してくれる。

素性を隠してはいるが、鬼である自分がこうも人の社会に溶け込めているのが嬉しいらしい。

それと、廃屋敷で新しく仲間になつたネメアは社交的になつてきて、今は悠々自適に外出して、外の世界を楽しんでいる。

冒険者として登録しており、ランクはB。

活動はほとんどソロで、洞窟探索や薬草採取などの簡単な依頼を好んで受けている。

たまにB級以下のパーティに一時的に加入して、冒険者達と交友を深めている。

ネメア曰く、生きている人達と関わるのが楽しいそうで、「低級冒険者達の魂はキラキラでフレッシュでアオハルなんデス！」と朗らかに語っていた。

サーヴァント——俺がテイムしているモンスター——の中では、ロクスと特に仲良くやつている

みたいだ。

昔からの俺の相棒であるケルベロスのメルトは、王国のマスコットキャラになるなど認知度が上がつており、デフォルメしたぬいぐるみやお守り、ストラップなども発売されるという人気っぷりである。

そして最後に、金剛不獄明王に進化したテロメアだが、彼は王国の門番を続けている。

正式な兵士ではないが、国王より特別に辞令が出ており、王国近隣のパトロールを担うまでになつた。

さらにテロメアは、人の文字を熱心に学んでおり、今では読み書きが出来るまでに成長した。

発声器官の構造上、人語を発する事は出来ないのだが、文字のやり取りで他の者達と意思疎通を図れるようになつた。驚いた事に、暇な時を見つけては彼なりの詩を書いて門番仲間に披露するなど、文化的な楽しみ方をしている。

詩を書く事になつたきっかけは、一緒にパトロールをしていた兵から「文字の勉強ついでに詩なんて書いてみたらどうだい？」モンスターが書く詩なんて未だかつて読んだ事がねえからなあ。読んでみてーもんだ！」がはは！」と冗談交じりに言われた事で、どうせならと奮起したそうだ。

さらに意外な事に、彼が書き連ねた詩は詩集となり、メルトがお手伝いしている商会から発売されているのだから、不思議な事もあるものだ。

ちなみに詩集のタイトルは、『鬼の細道』である。

とまあ、各々が自由に過ごしたこの一年はこんな感じだつた。

まあ、それはさておき、つい最近、世界に激震が走つた。

二ヶ月前、この『原初の世界』を強烈な天変地異が襲い、七日間にわたり様々な災害と地殻変動——七の黙示録——が起つた。

大地は裂け、山は崩れ噴火し、雨風は狂つたように吹き乱れ、川や海はまるで水龍のよう暴れまわつた。

その結果、いくつもの国やそこに住む人々が深刻なダメージを受けてしまい、滅びてしまった国もある。

俺達が暮らす王都も多少の被害を受けはしたが、そこはストームドラゴンが守護する国であるから、大きな被害はなかつた。俺が招いたとはい、ストームドラゴンさままである。

吹き乱れた雨風は、ストームドラゴンであるエスクードの力によつて制御され、加えて大きな山や川がない地形に位置する事が幸いし、水害や土砂崩れなどの被害もなかつた。

被害が小さかつた王国は、近隣国家への支援を惜しみなく行う事が出来た。

王国領地の境界には大森林が存在するのだが、その大森林を挟んだ隣国の被害は甚大であり、隣

国の側にあつた山が噴火し、さらに暴風雨の影響で地滑りや竜巻が発生。

地方の村や街も甚大な被害を受け、国民の八割が亡くなつてしまつた。首都も壊滅、国としての機能を失うという事態となつた。

王国は隣国で生き残つた者達を全て受け入れ、手厚く保護する方針を取つた。

また、隣国だけでなく、被害の大きかつた周辺国家への支援にも尽力しており、それもあつて大陸での王国の評判は青天井あおてんじょうであつた。

なお、隣国の領地は王国が吸收合併する事も決定しているのだと。

大災害以前より始まつていた王国の領地拡大の際に、街道の整備やモンスターの討伐などに力を入れていた事が功を奏し、避難民の受け入れや支援物資の迅速な供給などが滞りなく進められた。

王国は避難民達の新しい生活基盤の構築にも尽力し、住居や職を与えるだけでなく、心のケアや教育面での支援も積極的に行つた。

避難民の中には優秀な技術者や学者、職人も多く、彼らの知識や経験が王国にもたらす恩恵は計り知れない。

こうして王国は多様な文化と知恵を受け入れ、新たな時代への大きな一步を踏み出す事となつた。
「この際、周辺国をまるつと取り込んで、連邦樹立なんていうのもいいですわね！もちろん王はアダム様で！」などといふ太話を声高に喚く奴も隣にいるが……はあ、現実味があるから怖いよ。

王国を守護するストームドラゴンのエスクードは、王国の相談係という地位も与えられたらしいし、俺の知り合いがぐいぐい内政に食い込んでいつてゐるんだよなあ。
もちろん、避難民の中にはお貴族様やお偉方も交じつており、それらの処遇に頭を悩ませたり、トラブルがあつたりするそなつたが、そこは俺の知つた事ではない。

俺にとつて関わりが大きい事といえば、七の黙示録の際に大規模な地殻変動が発生し、それにより新たなダンジョンが発生した事だ。

さらに、各地の既存ダンジョンにも変化が起き始めたという事もある。

他の大陸がどうなっているのかは分からぬが、俺達の王国のあるこの大陸では、新たなダンジョンが三つ確認されていた。

一つ、大陸の端に出来た雲を貫く巨大な白い塔 “天楼の白銀巨塔”。

一つ、王国から少し離れた場所に存在した公国が七の黙示録によつて滅び、その首都が丸々ダンジョンに変容してしまった “煉獄冥府の深淵”。

一つ、ネメアと出会った廃屋敷があつた場所に発生した巨大な回廊型ダンジョン “黎明の魔回廊”。

調査の結果、この三つは階層を進むごとに敵の強さが増していくダンジョンであると判明し、踏破した冒険者パーティは未だない。

どれも、低層から中層まではB級冒険者のパーティでもクリアできるくらいの難易度で、特に天楼の白銀巨塔は人気のダンジョンになつてゐる。

従来のダンジョンとは違ひ、五階層ごとにセーフティエリアが存在しており、その分他のダンジョンよりも気軽に挑戦出来るという事もあるみたいだ。ちなみに、従来のダンジョンのセーフティエリアは、十階層ごとである。

中層から先はA級冒険者推奨となつておらず、深層ともなればA級パーティでも苦戦を強いられる難易度で、ギルドは最高難易度であつたS級を更新し、SS級と判断した。

だからといって、怯んで挑まない、なんて冒険者はいないわけで、深層での新しい報告がギルドに徐々に上がつてきているそうだ。

出現モンスターやトラップ、ドロップする素材などの情報が公開、共有されて少しずつだが確実に探索が進んでいる。しかしながら、俺達はまだ挑戦した事がない。

なぜか？ それはギルドからのとある依頼があるからだ。

依頼内容はいくつかのダンジョンで起こつた異変を調査しろというもの。

王国から離れた場所の山脈にある “瓦礫の紹壁” というB級ダンジョンの最奥に、突如として現実とは思えない煌びやかな景色が広がつた、という報告が上がつた。

ダンジョンというのは今でも謎が多い場所であり、洞窟の階層を下りたら急に平原が広がつていた、なんて事もあつたりする。

内部構造が一定周期で変化するダンジョンもあるが、新しいエリアが現れるのは稀だ。

最奥が変化したというのもあまり聞いた事がない、思いつく限り “鬼巖窟” の最奥が変化し、テロメアやミミルの眠つていた靈廟のような場所が出来たという事くらいなのだ。

鬼巖窟はA級ダンジョンだが、テロメアもミミルもS級オーバーの存在だ。

もし、あの時俺以外の冒険者が調査に行つていたら、その冒険者はテロメアに叩き潰されたか、

ミミルによつて凄惨な死を迎えるだろう。

だからこそ、冒險者ギルド本部のギルドマスターであるグラーフさんは、危険性を鑑みて俺達に調査を依頼してきた、というわけだ。

瓦礫の紺壁は既に調査が済んでおり、調査内容も報告済み。

結果から言つてしまふと、ダンジョンの最奥には情報通りのボスが鎮座していた。

強さが変わつたり攻撃の種類が変わつたり、なんて事もなく「腕試しデス！」と意気込んだネメアのワンパンで倒された。

ネメアはB級に甘んじてはいるものの、そこらのA級冒險者よりは断然強いのだから、当たり前と言えば当たり前なんだけどな。

その後、俺達を待ち受けていたのは、見覚えのある幻獣界の景色と、久しぶりな男との再会だつた。

幻獣界、それはとてもこの世のものとは思えない風光明媚な絶景が渋滞している、俺達のいる世界とは違う世界、リリスの故郷であり幻獣王バハムートエデンが治める世界だ。

去年、俺達が半年間行方不明になるという事件をきっかけに、あれよあれよと幻獣界に立ち入り、リリスの結婚式に乱入したのがつい最近のようを感じる。

そこで出会つたドラゴンの一体で、リリスの元許嫁、炎と氷を操る超絶イケメンのギュスターヴが、なぜか瓦礫の紺壁の最奥にいたのだ。

『久しぶりだな！ アダム！』

ギュスターヴは憎たらしくらいに爽やかな笑顔をこちらに向けて、心から再会を喜んでくれた。わけを聞けば、幻獣界にも謎の現象が起きており、突如このダンジョンへの道が開けたそうだ。バハムートエデンはこの現象を確認し、すぐさま他の王に招集をかけ、会議を開いたらしい。

調査はギュスターヴに任せれ、ここに到着してしばらく後に俺達がやつてきたみたいだ。

その場所は実に不思議な空間になつており、俺達から見て部屋の手前半分がダンジョン、奥の半分に広大な幻獣界の景色が広がつていた。

俺達が以前訪れた時は、多種多様な幻獣が空を舞い、地を駆けていた。
ダンジョンと幻獣界の境目には見えない壁があり、進めなくなつていた。

『不思議だろ？ 押しても切つても叩いても無駄なのさ。こんな事は今までなかつた。おかげで幻獣界はもう大変だよ』
やれやれ、と肩をすくめるギュスターヴだつたが、その顔は無邪気な子供のようにキラキラとしていて楽しそうだつた。

軽く世間話をしたらギュスターヴは去つていき、俺達は見えない壁と部屋の調査を終わらせてギルドへと帰還した。

そのまま報告をして、今はまた別のダンジョンの調査に来ている。

「しかし不思議だよなあ……既存ダンジョンの最奥がまさかあんな事になつてるとは……」

「これもアダム様の御威光が世界を搖るがした結果かもしませんわ！」

「そんなわけないだろ……」

俺達聖王龍鬼が今いるのは、王国の国境にある大森林。

ここは非常に広く、未だに全容が掴めていない密林である。

この大森林にはB級の“深緑秘踏”というフィールド型ダンジョンが存在しており、ここでもダンジョンボスがいる最奥のさらに先が見つかったのだ。

「入口あたりはお日様がほどよく差し込んで気持ち良かつたけど、奥に行けば行くほど薄暗くなつてくるね」

とモニカが呟く。

「デス！ ボクはこういうジメジメ鬱々とした空氣、大好きデスよ！ 魂がグッドバイブレーシヨンしてるデス！」

鼻歌混じりに上機嫌で歩くネメア。

リリスはメルトの上に乗り、ミミルはテロメアの肩に座つてのんびりとついてくる。

スライムのロクスには分裂してもらい、索敵や討伐を任せているので、危険は今のところなく、

俺達は森の中でピクニックでもしているような気分だ。

正直、俺達はS級パーティなので、こここのダンジョン程度であれば全員で来る必要はない。しかし俺達は以前、事故みたいなものだが、約半年の間行方不明になつてしまつた。

それが理由でどんな簡単な依頼でも、全員で行動しよう、という方針になつたのだ。

「おやおや？ 怪しげな霧が出てきましたデスね！」

先頭を歩いていたネメアが立ち止まり言つた。

ネメアの視線の先では分裂していたロクス達が集合し、霧の手前で行儀良く待つていた。

「マスター、どうするにゅ？」

かなり流暢な言葉で指針を問うロクス。徐々に言葉を覚えていたのだが、最近はかなり自然に話せるようになつてきた。語尾が「にゅ」なのは彼？なりの差別化らしい。

「この霧は最深部に近づいている証拠だからな、進んで問題ないぞ。ただ今までより少し強いモンスターがくるらしいなんだが……」

「このロクスが後れを取るにゅと？」

「思つてないさ、むしろモンスター達に同情してくるくらいだ」

深緑秘踏に足を踏み入れて以来、俺達は一度も戦闘をしていない。

理由はさつき述べた通りなんだが、複数に分かれたロクスが見敵必殺で仕留めている。

何も出来ないまま、目が合つたら即死という理不尽な暴力を体感しているモンスター達が少しだ

け可哀想に思えた。

この霧は幻覚作用のある環境トラップなのだが、それはモニカが無効化しているので、俺達は迷う事なくバスの所まで辿り着いた。

「さて、誰がやる？」

バスはグーリツシュリーフという大きな植物型モンスターと、そのお供であるウルフスバイダーという「メートルほどの大きさの獰猛な蜘蛛が五体。

本来であれば重戦士や剣士が盾役となつてヘイトを集め、中衛後衛がウルフスバイダーを狩つた後にグーリツシュリーフを叩くのがセオリー。

グーリツシュリーフの攻撃は根や枝を鞭のように操つたり、状態異常を引き起こす毒の花粉を降らせたりなど、数種類のパターンがある。

「ボクが行きますデス！」

「だそうだが、いいか？」

目を輝かせているネメアを横目に、他のメンバーに意見を聞いたが、皆一様に首を縦に振つた。

「わーい！ デス」

「それじゃ行つてこい、危なくなつたら言えよ」

「了解デツス！」

気合い十分、戦闘モードに移行したネメアの体が白い膜で覆われていく。

体に纏う白い膜はネメアの腕と足に集まり、獣のような鋭い爪を持つ手足の形状に変わつた。
【靈力兵装】——ゴーストキメラであるネメアの戦闘スタイルは、己に靈力を纏わせ、それを適

した形に変えて戦う万能型だ。

ネメアの靈力が尽きない限り靈力兵装は使用可能だし、纏うだけでなく、射出したり剣状にしたりと実際に自由自在なのである。

物理に完全耐性を持つゴースト系や悪魔系のモンスターにもダメージを与える事が可能だし、普通のモンスターにもしつかりダメージを与えられる。

「どっこいしょーーー！ デス！」

軽やかな足取りでウルフスバイダーに近づいたネメアが威勢よく右腕を振り上げた。

「ギツ——」

断末魔の叫びを上げる間もなく切り裂かれたウルフスバイダーを尻目に、ネメアは飛びかかつてきた二体のウルフスバイダーへ交互に右と左のパンチを繰り出した。

ネメアの拳が空気を切り裂き、ウルフスバイダーの堅牢な甲殻に衝突する。

靈力が爪先から迸り、魔物の体を貫き間髪容れず繰り出される連続攻撃——右、左、さらに右。踊るような軽やかな動きと、獣じみた荒々しさが融合し、周囲の空気まで震わせる。

二体のウルフスバイダーは反撃の隙すら与えられず、短い悲鳴を上げながら地面に崩れ落ちた。ネメアの瞳は次の獲物を探しながら鋭く輝いている。

靈力の白い光が一層増し、彼女の周囲が陽炎のよう^{かげろう}に揺らめく。

次なる敵の気配を察知したネメアは、その場でトントンと小さく跳躍し、残りのウルフス・パイダーを掃討すべく地面を軽やかに蹴つた。

ウルフス・パイダーを処理し終えたネメアは、息を切らす事もなくそのままグーリツ・シユリーフへと突っ込む。

「デスデスデスデスー！」

口癖のデスなのか死を意味するデスなのか、はたまたその両方なのか、ともあれネメアは実に楽しそうにグーリツ・シユリーフを相手取り、大した苦戦をする事もなく無事に討伐に成功した。

「おつかれ」

「絶好調デツス！」

俺が声をかけると、ネメアは満面の笑みでピースサインを突き出した。

それと同時に、俺達が来た道とは反対にあつた茂みが生物のようにザワザワと動き、新たな道が現れた。

第二章 来訪者と招き

俺達はそのまま奥へ進み、報告のあつた場所へと辿り着いた。

そこには、今まで通ってきた森とは明らかに異なる風景が広がっていた。

薄暗い森ではなく、陽光がさんさんと降り注ぎ、柔らかな風が肌を撫でる、とても心地のいい空間だった。

「綺麗……」

ぽつりとモニカが呟いた。

「なんじゃ眼たくなる場所よのう、くあ……」
陽光が降り注ぐ森の中には澄んだ小川が流れ、緑や白の小さな光の粒が至る所に舞い、幻獣界とはまた違う美しさがそこにはあつた。

「随分とのどかな場所ですけれど、お出迎えのようですね」

リリスの視線の先には、五十センチほどのモンスターがフワフワと宙に浮かんでいた。

その数は十。

「あれは……バンシーか！ このダンジョンに出てくるモンスターはB級下位から中位までの獣型や虫型だけ……アイツはA級ダンジョンに出るようなモンスターだ、それがなぜここに……」

小さな見た目とは裏腹に、凶暴な精霊型のモンスターであるバンシー。

強烈な叫び声で麻痺^{まほ}や恐怖などの状態異常を引き起こし、風の魔法も操る、空を舞う厄介な相手だ。

B級上位に位置しており、それが十体。

「まだ来るにゅ」

ロクスが触手で指した先には、高さ二メートルほどの木が数本、枝を揺らしながらこちらへ向かってきていた。

あれはトレントだ。これもB級上位のモンスターであり、毒や幻覚、麻痺などの状態異常を引き起こす有毒な花粉をまき散らすモンスター。

ボスとの戦闘で疲弊した通常の冒険者パーティが、何も知らずにここへ立ち入り、この数と遭遇したとしたら……相當に厳しい状況になるだろう。

このダンジョンの適正クラスの冒険者達が先に進めない理由はこれか。

「誰が行きますの？」

はあ、とリリスがつまらなそうに息を吐いた。

その瞬間、バンシー達は風を纏いながら空を舞い、トレントの枝が不気味な音を立てて擦れ合う。「にゅ」

自分が行くとばかりにロクスが声を上げ、触手が地面を這う。

同時にトレントの根が地面をうねり、バンシーの叫びが空に響き渡る。

しかしそれも一瞬、ロクスのしなやかな触手は無数に分裂し、バンシーとトレントを的確に捕らえ、全ての敵を断ち切った。

「お見事」

「にゅ。造作もにゅい」

ボスエリアの先の空間は、風景も異質、出てくるモンスターも異質。ギュスターヴのいた空間は大して広くなかったが、ここはそれなりの広さがある。

「みんな、手分けして調査を頼む」

「「はーい」」

森の中に散つていく仲間達の背を見送り、俺とメルトは別方向へ移動する。

「ますたー」

「なんか変だねー」

「変だよー」

「そうだな、なんというか、空気が凝縮されてるような感じだ」

このエリアに入つてから、吸い込む空気の濃度が格段に上がつてているのは確かだ。

濃度と言つていいのか分からぬが、とにかく肺に入つてくる空気が濃いのだ。

標高の高い場所では空気が薄くなるが、ここはその逆、濃すぎて少し重たいくらいなのだ。

そんな事を感じながら、生えている草や花々、木々の種類を調査していく。

体感で五百メートルほど進んだ所で、俺とメルトは透明な壁にぶつかった。

『進めないねー』

『不思議ー』

『解せぬー』

「ここもか」

瓦礫の紺壁の最奥と同じ、透明な壁が俺達の行く手を阻む。

壁の向こうには同じような風景が続いているのに、どうしても前に進めない。

壁伝いに歩いていくと、同じように歩いてきたモニカとミミルを肩に乗せたテロメアと合流した。

「あ！ アダムさん！ メルトちゃん！」

「ほ、主様かえ」

「どうだつた？」

「うーん、敵も出てきたけどやつぱり精霊型だつたよ」

「さつきのばんしい？ とかいうのと、こぼるとじえねらる？ とかいうのが数体同時に出了ぞい」

「コボルトジエネラルが数体!? A級モンスターじゃないか……」

コボルトジエネラルはB級下位モンスターであるコボルトの上位種で、群れを率いて出てくる敵だ。

聞けばお供のコボルトは一体もいなかつたらしい。

ジエネラルは一つの群れに一体がセオリード、群れる事は決してない。

「本当にここは変な場所だな」

「アダムさまーーん！」

「ますたーんにゅ」

背後から黄色い声と妙な語尾が聞こえ、振り向くとリリスとロクスがこちらに向かつてきているのが見えた。

「バラけた皆が前後から来たつて事は……」

「うん、多分ここ、壁が円形に広がってるんじゃないかな」

「だよな、モニカの予想通りだと思う」

ともすれば、恐らくもうすぐ――

「マスター！ お姉様！ ボクが来ましたデス！」

何やら両手いっぱいに果実を抱えたネメアが、のほほんと歩いてくるのが見えた。

「あいつ何食つてんだよ……まあいつは何食つても問題ないか」

なぜならネメアの肉体は、毒などの状態異常に完全な耐性があるからである。

これが発覚したのは、ネメアがダンジョン内で目についた物を手当たり次第、口に入れて食べるという習性があったからだ。

赤ん坊かよ、と突っ込んだのは言うまでもない。

本人曰く、「未知の探究こそ冒險者の真髄」と聞いたデス！」だそうだ。間違つてはいないんだけだ。

「マスターにもあげるデス！ 甘くて苦くて酸っぱ美味しいデスよ！」

合流したネメアが誇らしげに果実を渡してくるが、俺は丁重にお断り申し上げた。

多分、これは果実ではなくモンスターのサナギだからだ。

大人の拳より少し大きい程度で、表面は黄色くつるんとしているが、果実特有の果柄や果台がない。

知らないとはいって、これをネメアに伝えるのはやめておこう。

「ふふふ、実にユニークな皆様ですこと」

俺がネメアにちょっと引いていると、どこからともなく鈴の音のような涼やかな声が聞こえてきた。

「誰だ!?」

「リリスですわ！」

「やめろ、今はふざけてる場合じゃない」

「きやいん」

変な絡み方をしてくるリリスをあしらい、ざつと周囲を見回すと、少し離れた壁の近くに人の姿があつた。

「ここですよ、森羅万象の王」

「貴方達は一体？」

声の主は女性で、その周囲には四人の男女が立っていた。

「初めまして、森羅万象の王アダム。私は精霊界を統べる王、レミア・スピリティオールと申します」

「「ひえ!?」」

俺を含め、その場にいた全員の口から変な声が飛び出した。

それに透明な壁のこちら側にいる事にも重ねて驚く。

「ふふふ、驚きましたか？」

その顔が見たかつたんです」

口に手を当て、コロコロと笑うレミアだが、こつちは笑えない。

「……ちよ、え？」

俺が呆然としていると、リリスがひそひそと耳打ちしてくる。

「アダム様、の方……本物かもしれませんわ。滲み出る気配が桁違いですもの」

ちらりと視線を送ると、レミアの背後にいる四人の男女も、ただ者ではない雰囲気を纏っている。空気がピリリと張り詰め、こちらの動きを探るような視線が突き刺さる。

なぜこんな場所に精霊界の王がいるのか？ というクエスチョンが頭の中を駆け巡る。バハムートエデンと対戦した時と同じ、統べる者の気配をひしひしと肌に感じる。

じつとりと妙な汗が頬を伝う。

一方、レミアは余裕の微笑みを浮かべたまま、すらすらと言葉を紡ぐ。

「せっかくこうしてお会い出来たのです、もつと力を抜いてくださいな。私は精霊界の王として、ぜひ貴方と親交を深めたいだけなのですよ。この者達は私の従者ですので、どうぞお気になさらず」

「どこか戯けた様子なのに、瞳の奥には計り知れない色が見え隠れしている。

「はい……よろしくお願ひします」

俺がそう口にすると、レミアは嬉しそうに微笑んだ。

「光榮です。さて、私達がここに来た理由ですが——」

レミアが言葉を切ると、彼女の背後の空気が揺らぎ、淡い光が舞い始めた。

「此度は世界の理に關わる重大な話がござります。どうぞ、少しだけお時間をいただけますか？」

ゲート。原初の世界と他世界を繋ぐ転送門、俺達が幻獣界に赴いた時に使用したものとは様相が違うが、これは間違いなくゲートだ。

レミアの声は優しく涼やかなものの、拒絶の余地を与えない絶対の力を感じさせるものだつた。

俺は、息を呑みながら、静かに頷くしかなかつた。

「お待ちください陛下、やはり自分は反対です。このようなお戯れをするのも——」

俺達がゲートに足を向けたところで、従者の一人が口を開いた。

「黙りなさい。貴方の意見は後ほど聞きます。今は彼らを招く方が優先です」

「……はつ」

口を挟んだ従者をピシャリと黙らせたレミアは、どうぞ、と言つて先にゲートへ入つていった。どうやら従者達はこの状況が気に食わないらしく、ピリついた空気を前面に押し出していた。

敵意はなさそうだが、快くお出迎えというわけでもなさそうだ。俺達は従者達からの冷たい視線を受けつつ、ゲートに入つていった。

ゲートをくぐった瞬間、現実離れした夢の中に迷い込んだかのような光景が広がつていた。

そこは淡く輝く光に包まれた壮麗な城の大広間。

天井には色とりどりのクリスタルが星座のようにきらめき、壁面には流れる水と花々、金や銀の蔓が装飾のように不思議な紋章を象つていた。

そして大広間の中央には、無数の精霊達が列を成して並んでいる。

羽を生やした小さな妖精のような者から、人型の精霊、光に包まれた獣のような者まで、様々な精霊がその場に跪き、レミアを迎えた。

ここが精霊界の王であるレミアの居城なのだと、一目で分かつた。

荘厳さと幻想さが調和するこの場所で、俺はただその美しさに圧倒されて立ち尽くしてしまった。

精霊達の奏でる静かな調べが心地よく、花の香りが混じつた清涼な空気が、心の奥まで染み渡つていく。

「改めまして、ようこそ森羅万象の王アダム、そしてその仲間達よ。私は『精霊王』、レミア・スピ

リティオール。急な招待をどうかお許しください。此度は精霊界、及び、他の四世界と原初の世界における異変についてお伝えしたくお招きさせていただきました」
レミアがそう言うと、レミアと俺達の間の床から木製の円卓がせり上がり、人数分の椅子がそれを囲んだ。

「どうぞお掛けになつて」

俺はメルトとロクス、そしてテロメアを廐舍きゅうしゃ——俺のみが出し入れ出来る、異空間に存在するサーヴァント達の住居——に入れ、レミアに促されるまま席に着いた。

すると、すぐに淡い花の香りがふわりと漂う黄金色の紅茶が透明なカップに注がれ、茶菓子が目の前に並べられる。

精霊達の手によるもてなしは、ここが現実の世界とは異なる、緩やかで温かな空間である事を静かに物語つていた。

一口紅茶を口に含むと、ほのかな甘みと花の芳香が広がり、心の緊張がふつと解けていく。仲間達もそれぞれ、目を輝かせながら陶然とうぜんとした表情を浮かべている。

静かな円卓の空気には、これから語られるであろう重要な話の予感と、それを包み込む安らぎが同居していた。

「いかがですか？ 城の庭園で取れた自慢の茶葉なのですよ」
紅茶を飲んで一息吐いた俺達を、レミアは微笑みながら見つめていた。

「とても美味しいですわ」

「精霊様の世界でお茶会……夢みたい」

「キラキラで眩しいデス、目が痛いデス……ボクは岩陰とかのジメつた所の方が好きデス……」

「ばかたれ、変な事を言うでないわ。空氣読まんかい」

リリス達も思い思いの感想を口にし、緊張がほぐれていくようだつた。

精霊の奏てるハープの音色と、紅茶の湯気が揺らぐ向こうで、レミアの目が遠くを見つめるように細められた。

「それでは本題に入りたいと思います。貴方がたの世界で起きたあの大きな天変地異、精霊界にも余波が及びました」

その言葉に、場の空気がわずかに変わる。仲間達もそつとカップを置き、耳を傾けた。

「原初の世界で大地が裂け、空が吠えたあの日、精霊界でも風の流れが乱れ、水脈が震え、山の精霊も安寧あんねいを妨げられたのです」

レミアの声は静かだが、そこには確かな重みがあった。世界の垣根を越えて繋がる影響の大きさを、精霊達も肌で感じていたのだろう。

「余波は精霊界だけではありません、他の四世界にも同じように影響が及びました。原初の世界で天変地異が起きた後、我々は世界の狭間はさまに集まり五王会議を開きました。討論の結果、それは次元じげん震しんであるだろうと推測されました」

「次元震、ですか」

聞き慣れない単語に皆が一斉に息を呑む。

「過去数千年起きた事のない大規模な変動は、各世界に変化をもたらしました。それが先ほど貴方がたを出迎えた場所である『重複世界』の発生です」

「透明な壁で囲まれたあの場所ですか？」

「その通りです」

ボスエリアの奥に現れた、透明円形の壁に囲まれた異質な空間。

タイプの違う強力なモンスターが、セオリーを無視した挙動を見せるあの場所は、踏み込む者を選び実力の不釣り合いな者が踏み入れば忽ち躊躇される場所だ。

「重複世界」は幻獣界、精霊界、悪魔界、冥界、天界の全てで確認されております。原初の世界の一部がそれぞれの世界に現れ、そこは総じてダンジョンと呼ばれる場所の最奥と繋がつていています。どういう理屈かは……存じません。ですが、そこは次元のズレが生じており、そのズレが透明な壁として機能しているようです」

「だから見えるけど行けない、ってわけですか」

俺が相槌あいづちを打つとレミアは頷いて先を続けた。

「はい。ただ調べたところ、原初の世界側からは風景のみ認識可能ですが、こちらからは風景と人の姿の両方が認識出来ます。なので、各王は重複世界の場に監視塔を設け、万が一にも侵入がないとして機能しているようです」

「よう見張りをしておりますの。もつともゲートを開く力がなければ入つてこられないのは分かっていますが……」

「ではなぜ監視を？」

「悪魔界や冥界はどうか存じませんが、幻獣界、天界、そして精霊界では一種の観光スポットのような形になつてしまつて……むしろこちら側を監視する目的なんです。お恥ずかしい限りです」

「へ？」

レミアが恥ずかしそうにはにかみ、へへ、と頬を指で搔いた。

その言葉に、呆気に取られていると、誰かがブツと噴き出した。

それを皮切りにククク、と堪えた笑いが聞こえたと思えば、リリスもモニカもネメアもミニルも、声を上げて笑い出してしまつた。

「監視を行うまでは重複エリアで毎日誰かしらが宴会を開いて……それはもう大変でした」

幻獣界は娯楽が少ないのでバハムートエデンも言つていたし、精霊界とてそれは同じなのだろう。

原初の世界では重複世界の発生によつて大勢の人が動き調査が行われている、それに対しても精霊界では宴会か。

「危機感がないのか、感じる必要もないのか、恐らく後者だろう。」

皆の笑い声がしばらく続き、やがてリリスが「それって、観光スポットどころか、宴会場じやないの」と呟いた。

「精靈様達の宴会かあ、私も一度混ざつてみたいかも」とモニカが続いて冗談めかす。

「レミアは苦笑いを浮かべつつも続けた。

「まあ、今は監視の目も厳しくなつたので、さすがに日常的な宴会は減りましたが……それでも、ときどき誰かがこつそり集まる事もあります。精靈界の者は集うのが好きですから」

「精靈界では、一体どんな宴会が開かれるのじや？」

ミミルが問いかけると、レミアは少し目を輝かせて語り始める。

「楽器を奏でたり、踊つたり、空に光の花を咲かせる事もあります。ご馳走は、精靈が作る特別な果実や木の実を使った料理、お肉はあまり食しませんが、宴ともなればミルキーバニーやアクラミートなどの生肉も出でますし、お酒も色々と――」

レミアの弾むようなその語り口に、場の空気がふんわりと和やかになつた。

「ネメアはじつとりと目を細め、「陽キヤ怖いデス……」と妙に気疲れしたように呟いた。

「……んん！ 失礼、話が逸れましたね。アダムにお伝えしたかったのは、先ほど話した五王会議の内容です。これは六世界全ての変革であり、世界が一つに戻ろうとしているのではないか？ というのがバハムートエデンの推測でした。いささか極論かとは思いますけれど、私も他の王達も賛同しています。永らく不变であつた世界の変革は、必ず何かしらの意味を持つと私は思います」

レミアは小さく咳払いをし、姿勢を正した。

「あはは……次元のズレがあるといつても、世界が重なつてしまつたという事実はとても重要です

ね。原因は次元震……六世界の変革……か。これは、とても報告書には書けないな……」

レミアの話をまとめようと口に出してみるが、規模が大きすぎる。

「なら、私が報告書を書かせていただきますわ！ お任せあれー！ ですわ！」

リリスが何やら不穏な事を言い出した。

「念の為に聞くが、なんて書くつもりだ？」

「簡潔かつ分かりやすく、『世界が色々と大変えらいこつちやですわ』と！」

俺は胸を張つて答えるリリスの脳天にチョップを入れた。

「ひーん」

「ふざけるのはやめろつて何回言えれば分かるんだお前。しかも精靈王様の前だぞ、姫の沾^{じけん}券^{きよう}とか持^じとかはないのか」

「ありませんわ！ それにえらいこつちやなのは本当にございましょう？」

「ダメだこいつ、本当に姫かよ」

リリスの返答を聞いて、俺は綺麗にずつこけて椅子から落ちそつになつた。

「完全にそうと決まつたわけじゃないんだ。不安を煽るような言葉を使うな。それにそんなんじや報告書として受理されるわけがないだろ」

俺がため息と共に言葉を吐き出すと、レミアがククク、と声を押し殺して笑い始めた。

「ふふふ、リリス姫はユーモアに溢れておられますね。さすが自由と誇りのドラゴン族です」

と、ここで俺はレミアの言葉を聞いてなんとなくピンと来た。

リリスは重複世界や世界の変動などは大して気にしていないのだ。

面白そうな事が起きたかも、くらいの感想なんだろう。

精霊界に現れた重複世界の周りで、精霊達が宴を始めたのと同じような感覚なのだ。

「おほほ、それほどでもござりますわ！」

きつと、そうだと信じたい。そしてレミアの言葉も、リリスに対する甘やかしやヨイショではないと信じたい。

「おほほ！」

「うふふ」

そんな内心の呟きを押し殺しながら、俺は会話の流れを見守っていた。

レミアとリリスの笑い声が収まるごと、ふと場の空気が変わった。

まるで春の陽気が一瞬にして消え、清冽な冬の夜風が広間に舞い込んだような、キリッと透き通り引き締まつた静寂が訪れる。

「さて、これより大切なお話を移させていただきます。皆様方、席をお立ちになつて」

レミアの指示にしたがつて、皆立ち上がる。

その声には先ほどまでの遊び心の余韻がなく、精霊王としての威厳が漂つていた。

広間に集まつた精霊達が、彼女の一举手一投足に意識を集中させるのがはつきりと分かる。

「森羅万象の王たるアダムよ、我らが精霊界より正式に従者をお送りしたく存じます。世界の均衡が揺らぐ今こそ、精霊と人の協力が必要と私は考えます」

その言葉が放たれるのと同時に、円卓が静かに床に沈み始めた。

なんの音も立てず、自らの役割を終えた事を理解しているかのように、円卓は床と同化した。

部屋の隅々まで厳かな気が満ち、まるで時が止まつたかのような感覚が全員を包み込んだ。

「精霊界を代表し、火、水、風、地、光、闇——六属性を司る精霊をアダムの従者として派遣いたします。それぞれの力、お使いください」

「ちよつ、ちよつと待つてください！ いきなり従者つてそんな！」

レミアの言葉と共に、精霊達の中から六つの存在が前に進み出る。

どうやら俺の意見はスルーで、精霊を従者として遣わす事は既に決定事項らしい。

彼らはレミアの言う通り、火、水、風、地、光、闇——六大要素を司る力ある精霊達だろう。

最初に一步進み出たのは火の精霊か。

鮮やかな朱色の髪は逆立てられ、周囲には小さな炎が浮かんでいる。

情熱と力強さを感じさせるその姿は、見る者の内に眠る勇気を呼び覚ますようだつた。

「紅蓮の篝火」 グレイシス。御身の前に

次に、水の精霊がゆつたりと歩み出る。

流麗な青いドレスの裾からは水のしづくが滴り、微かな潮の香りが広間を満たす。

「涼麗の水泡」アクリア。控えましてござります」

柔らかな聲音は、嵐の海のように心を穏やかにする。

三番目には風の精靈。

そこだけ風があるかのように透明な羽衣がゆらりゆらりと揺れ、葦色の長い髪も波打つように空氣に踊る。

歩くたびに広間には春風のような爽やかな風が吹き抜ける。

「香陣の抱風」シルフィス。なんなりと」

四番目は地の精靈。

堂々とした体躯は岩石に覆われて、いるような出立ちで落ち着いた佇まいをしていた。

「静謐の剛地」オルドビス。ここに」

五番目は光の精靈。

白銀の軽鎧を纏い、柔らかな光を放つその存在は、闇に立てば黎明を感じさせるだろう。火とは違う、暗闇を払う穏やかな月明かりの如き温もりさえ感じさせる。

「彩輝の妙光」ルミライト、ここに参じ」

最後に現れたのは闇の精靈。

その姿は漆黒のロープに包まれ、静かな威圧感を漂わせている。

しかし、不思議と怖さはなく、むしろ包み込むような穏やかな深さを感じた。

「安寧の曉闇」クライル、光榮な招致」

六体の精靈達はレミアの前に跪き、右拳を胸に当てて頭を垂れる。

まるで古の騎士の如く、忠誠と誇りに満ちた振る舞いだ。

「この六体はそれぞれが属性の中でも高位の者達です。どうぞ連れて、いってくださいませ」

レミアが言うと、六体の精靈達は静かに顔を上げ、俺へと視線を向いた。

その目には迷いも不安もなく、ただ自らの使命に応えようとする強い意志が溢れていた。

広間の空氣が一層張り詰める。

力強い地、流れる水、揺れる炎、舞う風、静かな闇と、優しい光が絶妙に混じり合つており、それはまるで世界の理がここに集結しているかのようだつた。

俺は息を呑み立ち尽くした。

その光景は未だかつて見た事がなく、どんな美辞麗句をもつてしても語り尽くせないほど莊厳で、心の奥底から感動が湧き上がる。

「「「「アダム様。この身、この力、全ては御身の為に」」」」

六体の精靈達が声を揃え、忠誠を誓う。

その声は不思議な調和を持ち、六属性の響きが重なり合つて一つの旋律となり、俺の胸へと染み渡つた。

気が付けばリリスもレミアも、広間にいた精霊達も皆、静かにその瞬間を見守っていた。

「レ……精霊王陛下、突然の申し出に戸惑っているのですが……」

「レミアでいいですよ、貴方はいずれ私が仕える事となる御方なのですから」

「いや、そう言われましても……」

「まあ！まさか六体の高位精霊では物足りぬと仰るのですか!? それは困りましたね……」

「まあ、おつしや。まさか六体の高位精霊では物足りぬと仰るのですか!? それは困りましたね……」

「そ、そんなわけないじゃないですか！ 挪揄^{からか}るのはやめてください」

「うふふふ。ごめんなさいね、精霊は元来イタズラ好きなものでして……ご存じありません?」

口元を隠しながらケラケラと笑うレミア。

幻獣王バハムートエデンも精霊王レミアも、一世界を統一している偉大なる王だ。

その王が揃ってこう、フランクな方だと、どう反応していいか分からなくなってくるよ。

まあむしろ、高圧的な態度で来られるよりは数倍良いだろう。

幻獣王の実子であるリリスが俺の従者である事も、一種の緩衝材^{かんしょくざい}になつていてのかも知れない、

とリリスを横目でチラと見る。

目を伏せ、淑やかに立つて大人しくしているその姿は、幻獣の姫君としての気品に溢れていた。

「アダム?」

レミアの言葉でふと我に返つた。

べつ別に見惚れてたわけじゃないんだからねつ！

「すみません、知らないですよ……原初の世界で精霊と出会つた事なんてないんです」

「あら、そうなのですか。良ければアダムやお仲間達の旅のお話を聞かせてはくれませんか?」

「俺は構いませんが」

そう言つて仲間の顔を見ると、皆首を縦に振つてくれた。

モニカが輝かしい笑顔で一番激しく首を振つていたのに対し、ネメアは口をへの字に曲げながら渋々、といった感じで頷いていた。

どうやらネメアは精霊界の煌びやかさが苦手らしい。

あの子は大量のゴーストと同化した屍人^{しへん}であり、ゴーストキメラという一人しかいない種族だ。ゴーストは聖なる光や灯りに弱いものだし、そういうのが関係しているんだろう。

原初の世界に帰つたら、何か好きなものでも買ってやるか。

「アダム様、よろしいでしようか?」

闇の精霊クライルが頭を下げたまま口を開いた。

「はい、なんでしょう」

「我ら精霊は等しくレミア陛下とこの世界を敬愛しております。もしアダム様がその安寧に影を落とすようであれば……」

「その点は安心してください。もしも俺が道を踏み外すような事があれば、全力で殺しに来てくれる頼もしい友人がありますから」

クライルの言葉を聞き、幻獣界で出会ったギュスター・ヴェルがくれた言葉が重なる。

ギュスター・ヴェルは威風堂々としたドラゴンで、その言葉には覚悟と重みがあった。

彼とは短い付き合いではあるものの、剣を交え、互いの信念を確かめ合った友である。

俺がもし王として道を踏み外す事があれば、リリスを悲しませる事があったならば、その時は殺す——そうギュスター・ヴェルは告げた。

「皆考える事は同じ、か」

闇精霊クライルの静かな忠誠、レミアへの高潔な敬愛は確かに届いた。

王としてこんなにも敬愛されているという事実に、俺は深く感銘を受けた。

そして尊敬の念を抱くと共に、俺もまた森羅万象を司る王であるからには、原初の世界だけでなく、精霊界も等しく素晴らしい世界に。そして、深く敬愛されるような王になりたいと感じた。

「……ありがとう、クライル。その気持ち、しつかりと受け取った。俺も精霊界の安寧を心から願っている」

「光榮です」

クライルは静かに頷き、「少しだけ訂正を。先ほどの言葉は六精霊、並びに陛下の配下全ての総意です」と慎ましく告げた。

その言葉はつまり、「ちゃんとやらないと精霊界全ての勢力で森羅万象の王を潰しに行くかんね！」という事であり、俺は思わず肩をすくめて苦笑する。

「精霊界丸ごとを敵に回すのはさすがにごめんだな。いずれ時が来たら俺も君達の世界を守るために最善を尽くすよ」

その宣言に、精霊達の表情が少し緩む。レミアもその様子にほつと息を吐き、俺の手をそつと握った。と同時に、周囲からの冷たい殺気のような気配が俺を貫いた。

「陛下の手を……」「くつ羨ましい」と妙な呟きが聞こえるが、今は聞こえないフリをしておこう。そして六精霊を俺の従者とするタイムを行う。妙な緊張感が体を引き締め思わず唾を飲む。

世界の礎^{いしづち}を請け負う六属性の高位精霊達が自分の従者となる、少し前までは考えもしなかった事だ。

「皆、今からは対等だと思つて接してくれると嬉しい。では……俺に従え！【タイミング】！」

最初は火の精霊グレイシス、燃え上がるような紅蓮のオーラを全身に纏つたかと思えば、それを揺らめかせながら、堂々と俺の前に立つた。

その瞳には挑戦的な炎が宿る。

「そういう事なら……我が火焰を抑えられるか、試してみるがいい」

——火の高位精霊【グレイシス】がサーヴァントとなりました。



——スキル..【紅蓮掌】を会得しました。

「なるほど、これが森羅万象の王の力か」

グレイシスは口角をわずかに上げ、すっと後ろに下がった。

次は、水の精霊アクリア。

静かな湖面のような瞳を持ち、柔らかな気配で俺ににじり寄ってきた。

「私は激流よ？ ちゃんと流れを読んで包み込む事が出来るかしら？」

アクリアは優しく手を差し出し、俺もそれに応えしつかりと握手をした。

——水の高位精霊【アクリア】がサーヴァントとなりました。

——スキル..【蒼流の盾】を会得しました。

「なんとか頑張つてみるさ」

「ふふ、お手並み拝見ね」

アクリアは可愛らしく微笑み、ウインクをして下がつていった。
続いて、風の精霊シルフィス。

薄緑に煌めく薄羽な羽根を羽ばたかせ、小柄な体躯は軽やかに宙に浮いた。

「私の風はとても気まぐれよ？ アクリアほどじやじや馬じゃないけどね。よろしくぞアダムちゃん」

「あ、アダムちゃん……？」

唐突に距離感を詰められ、戸惑いつつも【ティイミング】を行う。

——風の高位精靈【シルフィス】がサーヴァントとなりました。
——スキル：【疾風乱舞】を会得しました。

「お姉ちゃんって呼んでもいいのよ？ ふふ！」

「謹んでお断りします……」

ケラケラと笑いながら、シルフィスは後ろに下がったが、「じやじや馬とは何よ」とアクリアに突っ込まれていた。

四番目は、地の精靈オルドビス。

六体の中で一番の巨躯を持ち、その逞しい体躯とは裏腹に落ち着きのあるじつしりとした声で語りかけてきた。

「しっかりと大地に足をつけ、搖るぎなき心の王となれるか？」

「そのつもりだ。しっかりと見届けてくれ」

オルドビスは拳を握り、ぐいと俺の胸の前に差し出してきた。
俺もそれに応え、拳を軽く当てた。

——地の高位精靈【オルドビス】がサーヴァントとなりました。
——スキル：【大地の鎧】を会得しました。

「ではな」

オルドビスはその巨躯に似合わず床を揺らす事もなく、ゆっくりと下がった。

五番目は、光の精靈ルミライド。全身の輪郭から柔らかな光を放ち、祝福のような優しい微笑みを浮かべる。

「私の輝きで何を照らすのか、見定めさせてもらうね」「ああ、よろしく」

——光の高位精靈【ルミライド】がサーヴァントとなりました。
——スキル：【黎明散光】を会得しました。

「無理は禁物よ、若王様」

「末長く頼むよ」

ルミライトは微笑みをふつと浮かべて下がった。

最後に闇の精靈クライルが一步踏み出す。漆黒のローブを纏い、全身が深い夜のような装いだ。

「この暗黒と闇は全てを黒く染めつくす。しかし恐れる事はない」

「怖くないさ、闇があつてこそ光が際立ち、光があつてこそ闇があるんだ。俺は全てを受け入れる」

——闇の高位精靈【クライル】がサーヴァントとなりました。 ——スキル..【影縫い】を会得しました。

「これで全員だな」

六精靈を一人ずつタイムし、それぞれの力とスキルを手にした。

精靈達もまた、俺が王として歩む道を静かに見守る事を誓つてくれた。

これからはさらに王としての誇りと責任が求められるはずだ、決して慢心する事なく歩み続ける

としよう。

レミアはそんな俺の姿を見て、微笑みながら静かに語りかけた。

「貴方なら、きっと世界をより良いものへと導いてくれる。精靈界も幻獣界と共に貴方がたを支え、

歩みましょう

「心強いお言葉、ありがとうございます」

「さて、と！ ちよつと長くなつてしましましたね」

パン、と軽く手を鳴らしたレミアは俺と仲間達、サーヴァントとなつた六精靈を見た。

「構いませんよ、大事なお話でしたし、まさか六精靈をタイム……従者になんて夢にも思いませんでしたから」

「本当はもつと皆様からお話を聞かせていただきたいところですが、それはまた別の機会にするとしましよう。アダム達もあの場所——重複世界を調べていたのでしょうか？」

「そうですね。俺達は冒険者ギルドという組織に所属していくまして、そこからの依頼での場所と別のダンジョン、オーバーラップ

「やはりそうでしたか」

「先ほどのお話では、次元のズレによる透明な壁で、双方の通行が出来ないとお聞きしましたが……ゲートは開けるのですね」

俺は話の最中に感じた疑問を伝えた。

「はい。ゲートは元々空間と時間を歪曲させておりますので。アダムの懸念を払拭するために伝えると、無許可にゲートを開きこちら側から向こうの世界に渡る事を禁じる法を公布しましたのでご安心ください。そもそもゲートは誰でも開けるわけではないですから、大丈夫ですよ」

「あはは……お見通しですか」

さすがとしか言いようのない先手打ちに、俺は笑う。

こうして突発的な精霊界への招致が幕を閉じ、俺達は原初の世界へと帰還した。

第三章 それぞれの適性

原初の世界のダンジョンに帰還した俺達は、そのままの流れでギルド本部へと向かつた。六精霊はとりあえず厩舎に入つてもらい、メルト、ロクス、テロメアと交流を深めてもらつてゐる。

王都の冒險者ギルド本部に着くと、ギルドマスターのグラーフさんが受付にいたのでそのまま声をかけた。

「お疲れ様です、グラーフさん。ただいま帰還しました」

「おおアダム君にリリス君達、調査ご苦労だつたな」

「それほど苦労もありませんでしたけどね」

「お茶の子トラトラですわ！」

「がつはつは！ それを言うならサイだなあ！ うむ、確かに君達が苦労する場所ならば徹底的に封鎖をしなければ世界が終わるなあ！」

リリスのボケにスマートな笑つ込みを入れたグラーフさんは、大きな声で笑いながら、俺の肩をバシバシと叩いた。

「あはは……とりあえず簡単に報告するとですね——」

詳細は後ほど報告書にまとめる、と前置きをして、ダンジョン深緑秘踏の最奥での顛末を話した。もちろん精霊界やレミア達の事は話していない。今はまだその時じゃないのだ。

この世界は「原初の世界」と呼ばれ、この他にも異なる世界が存在している——幻獣の住む「幻獣界」、精霊の住む「精霊界」、悪魔の住む「悪魔界」など、全部で五つの世界が隣合つてゐるという真実を、一度に語つたところで到底理解は得られないだろう。

相手が信頼出来る者であればこそ、打ち明けたい衝動に駆られるが、それでも確かな証拠や納得のいく判断材料がなければ、荒唐無稽な妄言だと切り捨てられてしまうに違いない。

「ふむ……」

グラーフさんは報告を受け、眉根を寄せて重い表情を浮かべた。

瓦礫の紺壁の最奥とは違い、ダンジョンのボスを攻略した直後、通常ではありえない強敵が出現し、その規則性も狂つてゐるという事実は、異質そのもの。

だからそんな顔をするのも当たり前だ。

「これは放置出来ん。早急に対策せねば……関係各所に連絡を取つて動いてみる。アダム君達は、今日はもう休むといい」